

# An International Conference on Flow

## Analysis: Flow Analysis IV に出席して

岡山大学理学部 本水 昌二

第4回 Flow Analysis 国際会議が本年4月17日から20日までアメリカ合衆国ネバダ州ラスベガスにおいて開催された。1979年第1回（オランダ・アムステルダム）、1982年第2回（スウェーデン・ルンド）、1985年第3回（イギリス・バーミンガム）に続くものである。第3回会議には、日本から和田、与座両先生他2名が参加された。すでに第3回会議において第4回は Las Vegas に決定していたが、第5回はぜひとも日本でという声がFIA研究会代表幹事の石橋先生はじめ多くの方々から持ち上がっていた。現在の我が国に於けるFIAに関する研究者層の厚さ、報文数そして組織化等を考えると、第5回会議を我が国で開催するのは至極当然と思われていた。そのような意気込みに加えて、第4回開催地の地理的好条件も加わり多数の参加者が見込まれていた。昨年10月熊本での分析化学会年会のミキサー会場で第4回会議が話題に上り、参加予定者は十数名に達することが確実にされた。そこで往復の飛行機だけでも団体になれば何かと好都合であろうということになり、酒宴の席でいつの間にか岡山で取り纏めのお世話をさせていただくことになっていた。出発から帰国まで10日間の日程の下、希望者は12名となり団体扱いとなることができた。

4月16日夕、成田を立ち、同日 Los Angeles に到着、バスで San Diego に直行。Mexico 領 Tijuana を見学した。翌17日5時頃 Las Vegas のホテル Flamingo Hilton に到着した。発表会場の Tropicana Hotel までは意外に遠く、タクシー約4\$（バス1\$、徒歩約20分）と少々不便をおかけした。

4月17日夕、Registration をすませ、7時から Tropicana Hotel での Buffet Dinner に参加した。この席で日本からの参加者が勢揃いした。

参加者（敬称略） 石橋（団長、九大工）；出口、田中、真柴（熊大理）；桐栄、善木（岡山理大）；本水（岡大理）；伊永（岡大工）；秋庭（林原）；青柳（住友化学）；和田（名工大工）；酒井（朝日大）；鈴木（前都立大）；佐藤、岡本（神奈川工大）；讃岐（サヌキ工業）。

今回の会議では、招待講演10件；口頭発表31件；ポスター発表65件；計106件であった。このうち、アメリカ25件；日本、スウェーデン各16件；台湾、イギリス各7件；デンマーク、オランダ各5件；スペイン、ブラジル各4件など20か国からの発表であり、回をおうごとに発表件数（前回84件）、参加者数も増しているようであった。

4月18日午前8時より、主催者 Dr. Pacey (Miami Univ.) の簡単な歓迎の辞に続いて、Prof. Ruzicka (Univ. of Washington) の招待講演 “Flow Injection Analysis Today and Tomorrow” が約30分間にわたり行われ、日本での F I

Aの隆盛及び我国におけるユニークなF I A例などの紹介もあった。引き続いて口頭発表、午後3時から5時すぎまではポスター発表が行われた。19日、20日も発表のスケジュールは大体同じ様式であり、次の6つのテーマに従って行われた（招待講演も含む）。

- (1) Detectors in FIA (9件)
- (2) Conversion Techniques (4件)
- (3) General Applications (36件)
- (4) Industrial-Process Control Based Applications (35件)
- (5) Chemical and Biochemical Applications (12件)
- (6) General Papers (10件)

これらの研究発表は、Anal. Chim. ActaのSpecial Issueに論文として近々公刊されることになっているので、内容については省略させていただく。

今回の会議は大したトラブルもなしに、比較的順調に運営され、ほぼ予定通りに終了した。発表の合間には適当にコーヒープレイクもあり、飲み物、フルーツをいただきながら、和気藹々ディスカッションも進んでいたようである。又、18日夕7時30分からはTropicana HotelのPollies Bergere Showを楽しみながらのDinner、そして19日夕7時30分からはConference Banquetも準備されていた（1時間前の6:30からはCash Barが始まっていた）。

少し発表にキャンセルもあったこともあり、スケジュールも少々変更されることもあったが、あまり細かいことは意に介せず、神経質すぎるくらい几帳面な日本の会議運営とは大きな隔たりを感じた。これはDr. Paceyの若さとアメリカのおおらかさによるものであろう。最後の20日には石橋団長より第5回Flow Analysisの日本での開催の紹介がスライド、パンフレットなどを使って行われ、大きな関心を呼んでいた。

21日からは各人の予定に従って行動したが、団体組の大部分はSan Franciscoに向かい、24日にはLos Angels空港を立ち、25日無事成田に到着した。

今回の会議について、二三気付いたことを述べさせていただきますと、第一に、会議の主催団体が明瞭でなかったこと（Dr. Pacey一人でがんばっていた？）、第二はAbstractは二頁程度のものとし、図、表が一、二含まれるようにすればDiscussionもより活発になるのではないか、そして第三は登録料等は銀行振り込み（又はCredit Card）が便利で安全ではないか、そしてこれは多分に参加者の自覚によるものでありますが、ネオンサインのあまり多くない会場がbetterではないか、ということであります。

しかし、今回の会議参加は最新のF I A研究にじかに触れ、世界の動向を知ることができたことに加えて、10日間ないしは4日間御一緒させていただいた方々と異国の地で様々なDiscussionができ、F I A研究者の方々と新しい人間関係が生まれたことも筆者にとっては大きな収穫であったと思っている。最後にツアーが独断的なスケジュールであったことをツアー御参加の方々にお詫びするとともに、1991年、日本における第5回会議が成功することを祈っております。